

we support ↓
RQ
災害教育
センター

MONTHLY

「東北に黒龍を送ろう! 大作戦しんぶん」改め
復興支援『すけさきた』
「すけさきた」とは
宮城県登米市あたりの言葉で
「ボランティアに来たよ」という
意味である

「すけさきた」とは
宮城県登米市あたりの言葉で
「ボランティアに来たよ」という
意味である

APRIL
11
2015



平成26年6月22日 YOMIURI ONLINE(4/8)
金物を海に落とすのは縁起が悪い。不漁になる、と漁師は考える。そこで、『落とし物を絵に描き、神社に奉納したことにしてしまおう』という習わしが生まれた。

宮城県・牡鹿半島の小湊浜にある五十鈴神社の内壁に、25枚の紙絵馬が貼ってあった。包丁、錨、金づち、ナタ。平成の日付のあるものは判読できるが、半数ほどは破れ、色あせて、何が奉納されたのかも分からない。

「こいづあ俺のだ」。案内してくれた漁師、阿部市太郎さん(83)の絵馬もあった。19年前に落とした簡易クレーンの部品だという。
「心のわだかまりを持ったままだと漁に影響する。だから、こうやって気持ちを静めるんだね」

海の男はみな豪快で細事にこだわらない、と私たちは思いこんでいる。しかし、こうした習俗を通して見えてくるのは、心の揺れ動きに気を配り、どこかで均衡を保とうとする繊細な漁師の顔だ。

南三陸町石浜の飯綱神社にも絵馬が13枚あった。石浜では「落とし物」という言い方をしない。「沖で包丁を降ろした」などと、あたかも自らの意思で海に投じたかのように語る。

最近の刃物の柄はプラスチック製で、落としても浮くから回収できる。悪天候の時はヒモで体に結わえておく人もいる。「昔ほどは降ろす人がいなくなつた」と、ワカメ養殖を営む高橋勝博さん(65)が教えてくれた。

漁師の心を鎮める習わし 失せ物絵馬



三陸沿岸には津波で神社を流された浜もある。南三陸町稲淵の八幡神社を訪ねると、建物は跡形もなく、鳥居の一部だけが残っていた。
奉納先を失った漁師はどうしているのか。
「何もしない」と、浜で出会った男性(66)は言った。
「だから、金物を落とすとモヤモヤして、いつまでも心が和まねえんだっけな」
津波は35歳だった娘を奪った。震災直後、男性は刺し網を持ち出して何度も沖に仕掛けたが、遺体は揚がらなかった。「神も仏もねえって、今もまだ思っている」。静かな口調だった。
家や船が再建されても、まだ日常は戻らない。住民が再び神社を求め、心の均衡を取り戻そうとする時が、本当の復興の始まりなのだろうと思った。
(文と写真・高倉正樹/抜粋は文責による)

『失せ物絵馬』は、一部の例外を除いて三陸に限られる習俗だという。川島秀一・東北大学教授(民俗学)が1997年に実地調査したところ、岩手、宮城、福島3県の59神社で計353枚が見つかった。
金物を海中に落とすこと自体は全国で見られる禁忌で、「竜神が嫌う」「刃物が光って魚が逃げる」などといわれる。落とした際の対処も「浮く木を投げる」「塩をまく」など地域ごとに異なる。



青葉神社に届きました

前号でご紹介した「鳥居モニュメント」のある仙台の青葉神社に、地元のMOKが「すけさきた」を届けてくれました。(上等な塗りの三方にのせていただき恐縮しております!)

宮司の片倉さん(右写真)によると、当初、倒れた石は切って別なものに使おうかという話もあったのですが、なぜかクレーンで持ち上げようとしても外れたりしてうまくいかなかったのだそうです。それを見ていた庭師さんが「では私にやらせていただけますか?」と石をこつちこつちと並べ替えてこの配置に。

『石がそこにいたいという意思がある。なんでも人間が思うようにはならないのです』と仰っていたとのこと。

人智を越えた大きな力に対し、謙虚であることによって事態が開ける。鳥居のお話はそんな実例のように思えました。

